

# 都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

## 著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

## 論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

都留文科大学附属図書館  
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号  
電話: 0554-43-4341(代)  
FAX: 0554-43-9844  
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

# 甲斐と萬葉集（一）

## 春日昌預と萬葉集

Kai and Manyoshu (1) : KASUGA Masayasu and Manyoshu

鈴木 武 晴  
SUZUKI Takeharu

### 一 序

幻の定家本萬葉集全二十巻の系統に立つ写本の存在が明らかにされたのは、一九九三年（平成五年）十二月二十六日のことであった（朝日新聞紙上）。貴重な発見であるこの写本の巻二十の奥書には「天明元年十二月 春日昌預」と記されている。書写者代表と推定されるその「春日昌預」は、甲府に住んでいた歌人で、甲府町年寄も務めた山本金左衛門の別名であることが、吉田英也氏と飯田文弥氏の調査によって明らかになった（山梨日日新聞一九九四 平成六年七月三日記事、甲斐路第八十号所載「歌人春日昌預とその周辺」

一九九四 平成六年八月十日発行）。二氏はまた、甲府町年寄を世襲した坂田家の文書の調査に基づいて、奥書に記されている「天明元年十二月」当時、春日昌預は甲府にいたと推定されることから、定家本萬葉集を祖とする写本は、甲府で書写された可能性が高いことを指摘されている（上掲山梨日日新聞記事）。

本稿者は、甲府在住のただ一人の萬葉学者として、叙上のことを深く受けとめ、いつかこの定家本萬葉集の書写本（現在、その所蔵者にちなんで「廣瀬本萬葉集」と呼ばれている）の書写に携わった春日昌預について書きたいという思いを抱いてきた。この思いを筆に託する契機を与えてくれたのが、吉田英也氏の編著『春日昌預全家集』（二〇〇一年十月二十日発行、山梨日日新聞社）である。こ

の高著を、吉田氏とし縁のあつた柳沢多賀弥子様から賜わつたことは幸運であつた。一読、豊かな知性と思いやりの心に裏打ちされた歌々に心打たれた。

『春日昌預全家集』は、目次によつてその全貌を示せば、次のとおり。

- 一 五年詠歌
- 二 安永二年癸巳秋詠草
- 三 安永八年亥七月より詠草
- 四 家集(天明五年 寛政六年)
- 五 梨園集(寛政四年)
- 六 梨園集(寛政十一年)
- 七 梨乃耶集(文化六年)
- 八 梨園集(文政五年)
- 九 梨園集(文政六年)

このうち、四の「家集」(天明五年 寛政六年)は、萬葉仮名を用いて表記された歌を約九十首収録する(吉田氏上掲書の「底本」解説)。萬葉仮名を用いての表記は、他に「梨乃耶集」(文化六年)の三〇七九番歌に見られるのみである(『春日昌預全家集』の歌上の漢数字は、付された歌番号)。「家集」(天明五年 寛政六年)に萬葉仮名を用いた歌がいかにも多いかが知られよう。吉田氏は、表記の面のみならず作品そのものについても、『万葉集』の影響を深く受けた秀れた歌が多い。」と述べ、甲府近郊を流れる荒川の氾濫による悲惨な被害状況を視察して詠んだ次のような歌々を例示している(「若松屋・加藤家の人びと」飯田文弥編『甲斐と甲州道中』所収・吉川弘文館・二〇〇〇年十二月十日発行、後に吉田氏上掲書の

「論考」に転載所収)。

八七八 千早ぶる神の仕業の雨なれば一夜の程に海をなすかも

八八〇 荒浪の中に叫びて手弱女の奥処も知らず沈みつるかも

八八一 あはれその泣く嬰兒を抱きつつ渦巻く水に入りし親は

八八五 はしけやし子らが手を取り手弱女の己が背負ひて叫び

けんかも

八八六 嬰兒のなからましかば手弱女もその身一つは逃れまし

めや

夫を思ひやりて

八八八 立ちかへり見るせやいかに愛しきその妻子も家も共に

流して

吉田氏の見解は首肯すべき見解である。

当面の「家集」の冒頭歌が歌われた天明五年七月は、廣瀬本萬葉集の奥書に記された天明元年十一月から三年七月後の時点である。影響はすぐに形に表われるものではなく、血肉化を経て具現化されるまでには、かなりの歳月を要するものである。そう考えると、当面の「家集」の歌々に表記と内容の両面において萬葉集の影響が見られることは、きわめて自然であり、かつ重要であると言えよう。本稿が見る限り、当「家集」の昌預歌における萬葉集の影はきわめて濃い。そのことは、廣瀬本萬葉集の書写経験による萬葉集歌の読みの検討と深化、そして内面における萬葉集歌の本質の受け入れとその血肉化が、数年の間にすでになされていたことを物語っていると思われる。そして、当「家集」の中に、廣瀬本萬葉集の書写経験を有機的に投影する歌々が見られるならば、その歌々から廣瀬

本萬葉集の書写時点の萬葉集歌の訓読・読解の様相や書写にかかわることを推知することも可能と思われる。

以下、萬葉学者の立場から、当「家集」を中心として春日昌預作品を論じつつ、春日昌預と萬葉集、昌預と廣瀬本萬葉集の書写のことについて考察したいと思う。

## 二 春日昌預の歌と萬葉集巻五の歌

当「家集」(天明五年 寛政六年)には、先述のように萬葉集歌を念頭に置いて詠んだと見られる歌が多数存在する。その中から最初に取り上げるのは、題詞と歌の可視的な面だけからも萬葉集歌を意識しての詠であることが明らかな次の歌である。

松浦小夜姫

八〇六 山乃辺尔領巾不理止武甲斐平波伊也遠離沖之舟嶋

(山の辺に領巾振りとどむ甲斐を無みいや遠ざかる沖の船かも)

題詞の「松浦小夜姫」は、萬葉集巻五の「領巾鷹の嶺歌群」と呼ばれている次のような歌群に登場する女性である(萬葉集の訓み下し文は、基本的に『萬葉集釋注』による。以下同じ)。

大伴佐提比古郎子、ひとり朝命を被り、使を蕃国に奉はる。巖棹してここに帰き、やくやくに蒼波に赴く。

妾松浦佐用、この別れの易きことを嗟き、その会ひの難きことを歎く。すなはち高き山の嶺に登り、離り去く船を遥望し、根然肝を断ち、黯然魂を銷つ。つひに領巾を脱ぎて廢る。傍の者涕を流さずといふことなし。よいて、この山を号けて、領巾鷹

の嶺といふ。すなはち歌を作りて曰はく、

遠つ人松浦佐用姫夫恋ひに領巾振りしより負へる山の名(八

七一)

後人の追和

山の名と言ひ継げとかも佐用姫がこの山の上に領巾を振りけ

む(八七二)

最後人の追和

万代に語り継げとしこの岳に領巾振りけらし松浦佐用姫(八

七三)

最最後人の追和二首

海原の沖行く船を帰れとか領巾振らしけむ松浦佐用姫(八七

四)

行く船を振り留みかねいかばかり恋しくありけむ松浦佐用姫

(八七五)

前文に記されてあるように、任那に遣わされる大伴佐提比古との別れを嘆き、高い山に登ってひたすら着物の袖を振ったという松浦佐用姫にかかわる歌群である。

歌群は、前文と八七一、後人(のちの人)の追和(八七二)、最後人の追和(八七三、四)、最最後人の追和二首(八七五、六)の次第で展開している。

前文及び八七一から最後人の追和(八七三)までの作者は大伴佐用姫、その歌々は、山上憶良の

松浦原佐用姫の子が領巾振りし山の名のみや聞きつつ居らむ

(八六八)

に対して詠まれた歌と推察され、「最最後人の追和二首」(八七四)

五)の作者は実際は山上憶良であると覚しい(拙著『テーマ別万葉集』第十章二七一頁脚注)。

春日昌預の先掲八〇六番歌は、初句「山の辺に」が「領巾振り」にかかるのではなく、「とどむ」にかかると見ることよって定まる歌で、「山の辺にとどめるべく領巾を振ったにその甲斐もなく、ますます遠ざかってゆく沖の舟よ」の意。一首は「領巾振り」とどむ甲斐を無み、「沖の船」の表現から、萬葉集先掲歌群の「最後人の追和二首」(八七四～五)の「海原の沖行く船」(八七四)・「行く船を振り留みかね」(八七五)を踏まえて詠んだ追和の歌と覚しい。

「最後人の二首」(八七四～五)は、第一首八七四歌が前文の「離り去く船を遥望し、悵然肝を断ち、黯然魂を銷つ。つひに領巾を脱ぎて鷹」の表現や佐用姫の心中を察した八七二丁三歌を意識して、「帰って」と領巾を振りつつける佐用姫のひたすらな姿を思い描き、第二首八七五歌は前文の「傍の者涙を流さずといふことなし」を意識して、遠ざかる船を呼びもとそうと、ひたすらに領巾ふれど、そのかいてもない佐用姫の心のせつなさを深く思いやうっている。二首は、序文の表現と響き合いつつ、佐用姫の内面を照らし出す秀れた女性心理描写の歌となっており(以上、先掲拙著『テーマ別万葉集』第十章二七二頁脚注)、読者の脳裏に、激しく動揺する一人の女性佐用姫の映像を思い描かせるのである。

これに対し、春日昌預の八〇六番歌は、萬葉集歌八七四の「海原の沖行く船」、八七五の「行く船」、そしてそれらと響き合う前文の「離り去く船」を踏まえ、遠ざかりゆく無情の船に焦点を当てている。このことは、昌預が、佐用姫のひたすらな領巾振りの行為を想

い描きつつ詠まれた萬葉集八七四丁五の時点よりもさらに進んだ時点の佐用姫の映像を思い描き、領巾ふることをやめ、心身虚脱状態となりながらも目は遠ざかりゆく船をじっと見据えて離さぬ佐用姫のその視点に立って、歌を詠み成したことを物語っている。昌預の八〇六歌は、萬葉集の「最後人の追和」(八七四～五)に「つくく」「最後最後人の追和」と言うべき作品となっているのである。

昌預は、「最後人の追和二首」(八七四～五)が照らし出す激しく動揺する佐用姫を不憫に思ったのである。このままでは佐用姫の心は鎮まらなれないと思ったのである。愛の波の激情の後には屈のような愛の静けさが訪れる。人間の心理と行為の普遍であるが、このことも考慮して、動から静への佐用姫の心理変化と動作の変化を推察しつつ、八〇六歌を詠み成したものと思われる。

領巾を振ることをやめ、ますます遠ざかってゆく佐提比古の船を見つめつつける佐用姫。船が見えなくなっても、佐用姫の網膜にはいつまでもその映像が焼きついているのである。

「領巾鷹の嶺歌群」の物語的歌群は、現在見るように八七四～五の歌で終わっていても読者に劇的場面を想起させて印象的である。けれども、そこに春日昌預の八〇六歌が添加されることによって、この物語的歌群はいっそう物語性を帯び、佐用姫の動から静への氣息の流れに即して幕を閉じることになるのである。

叙上のような昌預歌八〇六の読みに拠れば、昌預は萬葉集を相当深く読みこんでいた人物と言える。

昌預が萬葉集巻五の歌を踏まえて詠んだ事例は他にも存する。

着物取られける年詠める歌

八九九 いかでかは語り継がまし賜りつるあたら御衣の厚き慮

みを

九〇〇 朝宵に身に触れまししちの(2)実の父の形見の衣悲しも

九〇一 何時かしも愛しき妻子に荒妙の布衣をだに我は着せま

し

九〇二 富人の捨つらん絹もあらませば拾ひ取りても子らに着

せてん

九〇三 人皆は装ひつくれどあら妙の布だに着せん術も知らな

く

この歌群は、直前に、寛政二年に逝去した父春日翼の一周忌の歌が存することから、寛政三年(一七九一)の作と推定される。この年、昌預は、家族の着物と亡父の形見の衣を何者かに取られるという事件に遭遇したのである。おそらくは、夜、家族皆が寝ている時のことであろう。脱ぎ置いた着物も保管してあつた着物もみな持ち去られてしまったのであろう。着る物もなく途方にくれている時に、御衣を恵んでくれた人がいたのである。第一首八九九は、その御礼の心を述べた歌である。第二首九〇〇は、父の形見の衣への執着を詠み、第三首から第五首(九〇一〜三)には、妻子に衣のないことを嘆いている。この九〇一〜三には、萬葉集卷五の山上憶良作「老身に病を重ね、経年辛苦し、児等に思ひを及す歌」(八九七〜九〇三)の次の二首の歌の投影が見てとれる。

○ 富人の子どもの着る身無み腐し捨つらむ絹綿らはも(九〇

〇)

荒袴の布衣をだに着せかてにかくや嘆かむ為むすべを無み(九

〇一)

具体的に言えば、昌預歌九〇一と九〇三は憶良歌九〇一を踏まえ

て同様に嘆き、昌預歌九〇二は、憶良歌九〇〇を受けて、「もし富人の捨てている絹があるならば拾い取っても子らに着せよう」と追和している。

予期せぬ出来事に遭遇しても、このように萬葉集歌を踏まえ、思いやりの心を述べているのである。萬葉集の歌と心を真実知る者の成せるわざである。

### 三 春日昌預の亡父哀悼追慕詠と萬葉集

当「家集」(天明五年 寛政六年)の中でとりわけ注目されるのは、実父春日翼(加藤竹亭)の逝去を悼み悲しみ、その面影を追慕する歌々である。

昌預の父翼は、国学を修め、持明院流書道の奥儀を極めた人で、富裕なその家には和漢の古書を収蔵したという(『山梨百科事典』の「加藤竹亭」の項 佐藤八郎氏担当執筆、一九七二年六月、山梨日日新聞社)。その翼の逝去は、甲府町年寄「御用日記」によれば、寛政二年(一七九〇)の六月四日のこと(先掲吉田氏・飯田氏稿)。享年七十六。昌預四十歳の時のことであつた。

亡父を哀悼、追慕する歌、その数三十八首。当「家集」二〇四首中の約十九%を占める。まさにそれらの歌々は昌預生涯の絶唱といつても過言ではない。

三十八首のうちわけを示せば、下記のようになる。命終迫る病床時の歌(八一三)、命終直後の歌(八一四〜八)、葬送時の歌(八一九)、初七日の墓参時の歌(八二〇)、それ以降の六、七、八月頃の歌(八二一〜八三七、八五八、八六一〜三、八六九〜八七六)、一

周忌の時点の歌（八九六〜八）、その後の歌（九三三）。

昌預の亡父哀悼追慕の詠において留意すべきは、そのほとんどが萬葉集歌を踏まえていることである。以下、順に具体的に見てゆこう。

父の命御病時作歌

八一三 天地之神尔美和須辺夜昼止身毛柵不知恋祈禱

（天地の神にみわすへ夜昼と身もたな知らず乞ひ祈るかも）

死期迫る病床の父。昌預は、天地の神に神酒の瓶を据え参らせて、夜昼となく我が身のことも忘れてひたすら父の命の無事を神に乞ひ祈るのである。「天地の神にみわすへ……乞ひ祈るかも」という一首の結構は、萬葉集歌に拠る。すなわち、「高市皇子尊の城上の殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌」（二一九九〜二〇一）の

「或書の反歌」、

（一） 哭沢の神社に御瓶据え祈れども我が大君は高日知らしぬ（二〇

の上三句や、「天平元年己巳に、撰津の国の班田の史生文 龍麻呂自ら経きて死にし時に、判官大伴宿禰三中が作る歌」（三四四〜四五）

……たらちねの母の命は 齋瓮を前に据え置きて 片手には木綿取り持ち 片手には和袴奉り 平けくま幸くませと 天地の神を祈（二）ひ禱（三）み……（四四三）

の傍線部の表現などを、昌預が熟知していたことを物語っている。また、一心な様を表わす第四句「身もたな知らず」も、萬葉集の「藤原の宮の役民の作る歌」（一五〇）に

…石走る近江の国の 衣手の田上山の 真木さく檜のつまでを  
ものぶの八十宇治川に 玉藻なす浮かべ流せれ そを取ると  
騒く御民も 家忘れ身もたな知らず 囁しもの水に浮き居て  
我が作る日の御門に  
とあり、「上総の周准の珠名娘子を詠む歌」（九一七三〜八八九）にも、

かな門にし人の来立ては夜中にも身はたな知らず出でてぞ逢ひける（一七三九）

と用いられている。このように、昌預歌八一三は、萬葉集歌の表現に裏打ちされている。けれども、「夜昼と」が「身もたな知らず」を修飾し、その二句が結句の「乞ひ祈るかも」を強く押し出し響かせる表現は、萬葉集にはない。昌預は、個々の表現は萬葉集歌に拠りながらも、それを昌預自身の心情に即して組み立て、深い思いの独自の表現を成しているのである。

昌預のひたすらな祈りの甲斐もなく、父は逝去する。無言の、青銅のように冷たくなった父を見つめて、悲しみを吐露したのが次の歌々である。

父命之久御病尔南也美坐天終尔美隠給婦乎悲天作歌

（父の命の久しく御病になやみましてつひに隠れ給ふを悲しみて作る歌）

八一四 久方のあめの如くも尊みし父のみことに別れつるかも  
八一五 ぬば玉の夢なりけりと思ほえて現のことは思ほえぬかも

八一六 玉床に現の如くいませれど御言問はさぬ父の君かも  
八一七 ますらをの太き心も父の父の別れにじづめかねつも

第一首八一四は、「久方のあめの如くも」の比喩を用いて、常に仰ぎ見た尊い父との別れを悲しむ。この比喩表現には、萬葉集の「長皇子ながのみこ、彌路やろの池いけに遊あそぶ時に、柿本朝臣かきもと人麻呂ひとまろが作る歌」(3 三三九〜二四〇)の、

……ひさかたの天見るごとく  
まさ鏡かがみ仰あやぎて見れど 春草はるのくさのい  
やめづらしき 我が大君かも(二三九)

の比喩表現が投影していよう。  
第二首八一五は、「夢」と「現」とを対比させつつ「夢」に重心を置いて、父の逝去がいまだ信じられない心境を述べている。かけがえない人を亡くした直後の普遍的な思いである。第三首八一六は、第二首を承けて、玉床たまどに生前と同じように横たわっているけれど、御言葉みことごを問いかけてくださることもない父に深い寂しさを抱いての詠。「現の如く」とある点が重要で、第二首八一五と同じ「現」の語を用いながらも、第二首の現実の意に対して、現身うしみの意に用いている。第四首八一七は、第一首に呼応し、父との「別れ」に切なく動揺する心境を率直に打ち明けている。第一首と同様、萬葉集歌と有機的にかかわる歌で、草壁皇子くさかきのみこの殯宮ひなみや時に詠まれた「皇子尊みこのみことの宮みやの舎人とねり等ら、働か傷なしびて作る歌二十三首」(2 一七二〜一九三)の、  
真木柱まきむら太おとき心こころはありしかどこの我が心こころ鎮しづめかねつも(一九〇)

を踏まえていることを突きとめることができる。この萬葉集一九〇歌は、「真木柱まきむらのような太く物に動じない心はあったはずなのに、今はとても悲しみを鎮めることはできない。」の意。昌預あきよは一九〇歌の「真木柱」を「ますらを」と改変し、甲府町年寄あひのちのとしよという官人の立場で父との死別を悲しんでいるのである。

以上、見てきたように、昌預の八一四〜七の四首は、語句・発想

の面から、外側第一首八一四と第四首八一七、内側第二首八一五と第三首八一六とがそれぞれ対応する構造体となっていると言える。このような四首対応構造体も萬葉集に多数存するのである(4 四九六〜九、8 一四二四〜七など)。

昌預歌八一四〜七の直後に存する次の歌は、父の遺愛の鳥を通して悲しみを述べた歌である。

飼かひ置き給たまひし鳥とりを放はなちける後に詠める  
八一八 朝宵あさよに愛うで慈あはしみ飼かひましし鳥とりはも鳴なきていづくにあ  
らん

鳥とりにちなみの「翼」という字の名を持つ父は、ひときわ鳥とりに関心を寄せ、鳥とりを愛うでたことと察させられる。愛うで慈あはしんでくれた主人を亡なくして寂さしそうにしている鳥とり、その鳥とりを不憫ふみんに思おもって、天あまへ、父ちちのもとへと放はなつてやったのである。その鳥とりに、父ちちに会あいたいという昌預あきよ自身の心こころを託たくして、「鳥とりはも鳴なきていづくにあらん」、鳥とりは鳴なきながら今いまどこにいますか、父ちちに会あえたであらうか。鳥とりとも昌預あきよの心こころも、遠とほい世界よこに行いってしまっただ父ちちを追おってゆくのである。この歌にも、昌預歌八一七のところで掲あげられた萬葉集の草壁皇子くさかきのみこの薨な去しを悼なむ歌辭うたことばの、

鳥とりの宮みや上の池いけなる放はなち鳥とり荒あびな行きそ君座きみざさずとも(2 一七二)

の「放はなち鳥とり」の発想が響こいていよう。  
八一八歌の次には、野辺送のべのこり(葬送むすび)を終おえて帰かえる時の心身こころみの虚うつろ脱だつ状態じょうたいを詠うんだ歌うたが置おかれていよう。

野辺送のべのこりして帰かえるさに詠うめる  
八一九 あら野のらに葬はなりまつりて帰かえらへばいけりともなし土つちは踏ふめども



第三句「帰らへば」の「へ」は継続の助動詞「ふ」の已然形で、「帰らへば」は昌預ら遺族・親族が葬送を終えて帰ってゆくと、の意と考えられる。「生けりともなし」は、「自分が生きているとは思えない」の意。

この八一九歌も、萬葉集歌の言葉に裏打ちされた歌である。上三句の「あら野らに葬りまつりて帰らへば」には、萬葉集巻九の田辺福麻呂歌集所出「弟の死去を哀しびて作る歌」(一八〇四、六)の、あしひきの荒山中に送り置きて帰らふ見れば心苦しも(一八〇六)

の影響があろう。また、下二句「いけりともなし土は踏めども」については、「生けりともなし」が、妻の死を深く悲しむ柿本人麻呂「泣血哀動歌」(二二〇七～二二二)に、  
衾道を引手の山に妹を置きて山道を行けば生けりともなし(二二二)  
と見え、「土は踏めども」は、右掲の人麻呂歌二二二と第三句が共通する次の歌に、  
た廻り行算の里に妹を置きて心空にあり地は踏めども(一一二五)

四一)と、用いられている。昌預はこれら二つの表現を合体させて、「生けりともなし地は踏めども」(悲しみの空虚の身は、生きているという存在感覚を持ってない、地を踏んでも、の意)という大地に息づく人間存在の悲しみの極みの表現を成したのである。その二句だけに限るならば、「妹を置きて、山道を行けば生けりともなし」と移動に重心を置いて「生けりともなし」を押し出す人麻呂歌よりも存在の悲しみが浮き立つように思われる。

昌預歌八一九の次は、初七日の墓参の折の歌と覚しき歌。

八二〇 真草刈るあら野も父のいませれば夜昼分かず家とせる  
か七  
み墓へ詣でて詠める

真草刈る荒野の中に立つ父のみ墓。「荒野といえども父がずっとおいでになるので、夜昼を分かつたずつねに家としておつかえすることです」と昌預はうたう。「真草刈るあら野」は、萬葉集の、亡父草壁皇子を追慕する軽皇子の遊獵時にうたわれた柿本人麻呂歌(一四五、四九)の、  
ま草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とぞ来し(四

七)  
の傍線部を踏まえた表現と推断される。また、八二〇の一首全体には、草壁皇子殯宮時の舍人等慟傷歌群(一七一～一九三)の、  
外に見し真弓の岡も君座せば常つ御門と侍宿するかも(一七四)  
の歌の発想が生かされていよう。

初七日の供養の後も打ちつづく亡父追慕の念は、八二二～四の夢の歌に結晶する。

夢に見えませける夜詠める

八二二 父君の出でます袖をひかふると思ひしほどに夢は覚め  
けり  
八二三 陽炎の仄かに見えて夜昼と父のみことの忘れぬかも  
八三三 ぬば玉のこのよの夢に見えましし父の御影の名残悲し  
も

八二四 青旗の小旗の色も山際に夕べの雲と柵引けるかも  
四首は、第一首八二二と第三首八三三が「夢」で対応し、第二首

の「陽炎の」の比喻に対して第四首は「夕べの雲と」の比喻を用いて応じている。このような隔歌対応の四首構造も萬葉集に多数存在する（三四七〇～四七三など）。また、歌詠そのものに注視すれば、第二首八二二は、萬葉集の天智天皇哀悼歌群（二一四七～一五五）の、

天皇の崩りましし後の時に、倭大后の作らず歌一首

人はよし思ひ思むとも玉纒影に見えつつ、忘らえぬかも（一四九）

を踏まえた歌と考えられる。第三首八二三歌に「父の御影の名残悲しも」と詠んだのも、右掲の一四九歌の「影に見えつつ」を意識したものと見てとれる。とすると、第四首八二四は、その「青旗の小旗の」の表現から、萬葉集一四九歌の直前に存する次のような一四八歌を踏まえたことが明らかになってくる。

一書に曰はく、近江天皇聖跡不<sub>レ</sub>予、御病急か<sub>ニ</sub>ある時に、大后の奉獻<sub>ス</sub>御歌一首

青旗の木幡の上を通ふとは目には見れども直に逢はぬかも  
（「木幡」の原文は諸本一致して「木旗」）

右の萬葉集一四八歌においては、葬旗を想わせる「青旗」は地名「木幡」（京都府宇治市北部の地）に冠する枕詞として機能している。けれども、昌預歌八二四では、「青旗の小旗の色」と、葬旗そのものに焦点をあて、その「色」をクローズアップしている。そして、その無常の色のたなびきを「山際に夕べの雲と柵引けるかも」と印象的に詠み、独自の光彩を放っているのである。

ここで一つ注意しなければならぬことがある。それは、萬葉集一四八歌では「青旗の木幡の」（原文「青幡乃木旗能」）とあるのに

対し、昌預歌八二四では「青旗の小旗の」とある点である。「木」と「小」の一字の違いは看過できない。なぜなら、萬葉集の現存諸本は一致して「木」に作り、「小」に作る写本は一本もないからである。昌預が関わった廣瀨本萬葉集にも「木」とあるのである。

案ずるに、昌預が「小旗」としたのは、賀茂真淵の『萬葉考』に、  
青旗乃、白旗を小旗能上乎。今本は小を木に誤りつ。同じ言に小の發語を置いて重ねいふ、古歌の文のうるはしき也、さがみ嶺の小旗、玉さゝの小旗、などの類いと多し、

と述べる誤字説に拠ったためだと考えられる。

昌預が書写に携わった廣瀨本萬葉集には、『萬葉考』の訓説を朱または淡墨で記入した例が目立つ。巻三、九、十などに七箇所見られる昌預自身の書き入れのうち、巻三の四七二番歌の「不忍都毛」の右には墨で「シヌビカネツモ」という『萬葉考』の訓が書き入れられてある（『校本萬葉集十八 新增補 追補』、『廣瀨本萬葉集解説』参照）。

昌預歌八二四の、『萬葉考』の誤字説による「青旗の小旗の」の表現は、『萬葉考』の説を尊重する廣瀨本萬葉集の書き入れと規を一にしていると言えよう。また、昌預が書写に携わった廣瀨本の歌の本文に拠らずに、『萬葉考』の説に拠って自己の歌を詠み成したのは、『萬葉考』の説による本文が昌預の心身に沁み込んでいたことを物語っている（『萬葉考』の説による昌預の歌作の他の事例については、後に言及する）。

昌預歌八二二～四の次には、七夕当夜の三首の歌（八二五～七）が置かれている。

七月七日夜

八二五 男星乃裳之裾濡志此夕浮津能浪尔舟出世須囀

(男星の裳の裾濡らしこの夕べ浮き津の浪に船出せす  
かも)

八二六 ぬば玉の夜の更け行かば月も入らん妻迎へ船早も漕ぎ

こそ

八二七 久方の天の河辺を行き返り舟呼ぶほどに夜は更けにつ

つ

一見、亡父追慕と関わらないように見えるけれども、この三首の七夕歌には亡父と会えない昌預の嘆きがこめられていると思われる。

三首は、圏点や傍線・波線で示した語句・表現から、萬葉集の次のような山上憶良七夕歌(8-1527, 9)を念頭に据えての詠と見られる。歌数も、双方三首ずつ。

彦星し妻迎へ船漕ぎ出らし天の川原に霧の立てるは(1527)  
霞立つ天の川原に君待つとい行き帰るに裳の裾濡れぬ(1528)

八)

天の川浮津の波音騒くなり我が待つ君し舟出すらしも(1529)

九)

このように憶良七夕歌の語句・表現を踏まえている。しかし、内容は異なる。憶良七夕歌三首は、第一首から第三首へと逢える期待は増し、逢えることを予兆して閉じられる。一方、昌預歌は、その憶良七夕歌第三首を第一首に踏まえ、ざわめく浮津の浪に、織女と逢える期待に胸高鳴る彦星の船出をつたう。けれども、憶良七夕歌を1529、1527、1528の順に踏まえつつ、「ぬば玉の夜の更け行かば月も入らん……早も漕ぎこそ」(826)、「舟呼ぶほ

どに夜は更けにつつ」と逢えぬ嘆きの色を深めてゆくのである。彦星に亡父を、織女の思いに昌預自身の思いを重ねて、亡父に会えない嘆きをこめて見ると見るゆえん。

こうして憶良七夕歌を踏まえて詠んだことが、憶良の他の歌にも思いを及ぼすことにつながり、就中、大切な幼な子を亡くした人の悲しみを詠んだ「男子名は古日に恋ふる歌三首」(590四六)の、

……やくやくにかたちつくほり 朝な朝な言ふことやみ たま  
きはる命絶えぬれ 立ち躍(をど)り足すり叫び 伏し仰ぎ胸  
打ち嘆き 手に持てる我が子飛ばしつ 世の中の道(九〇四)

の傍線部の表現の想起に到り、亡父命終の時点に立ち帰つての次の二首を吐露したものと想われる。心の中の時間は、物理的時間のよう直進するのみではない。止まることも、過去に立ち帰ることもある。憶良歌を通して、父長逝の日がまさまざと昌預の目に浮かんだのである。

父の別れに詠める

八二八 立ち踊り足摺り叫び嘆くとも世はせん術の方便知らず

七

八二九 茜さす日の暮れゆけばいや増しに父のみことの思ほゆ

るかも

題詞の「父の別れ」は、命終時の先掲八七歌に用いられていた言葉である。八二九歌も命終時の八一四歌の「久方のあめの如くも尊みし」の表現や八一五歌の「ぬば玉の」の枕詞を意識し、赤赤と西に沈みゆく日に亡父を重ねて、胸をしめつけられるように増してゆく父への思慕を詠んでいる。

今はただ亡父の形見の品を通して亡父を偲ぶよりほかにすべはない。亡父遺愛の「箏」を見て悲しみを述べた歌が八三〇番歌である。

もてあそばしける箏を見て

八三〇 御手触れし名残と思へばとるからに玉の緒の音のみし泣かゆ

一首は、「父の御手が触れた名残の品と思えば手にとる、するとすぐ玉の緒が音を立てるように、声をあげて泣けてくればかり。」の意。「とるからに」は、萬葉集の、

初春の初子の今日の玉箏手に取るからに揺らく玉の緒（20四四九三）

の事例に学んだものか（ただし、四四九三の「玉の緒」は玉を付けた箏をいう）。また、結句の「音のみし泣かゆ」は、萬葉集に類出する悲しみの表現で、挽歌には、次のように用いられている。

君に恋ひいたもすべなみ葦籬の哭のみし泣かゆ朝夕にして（3四五六）

葦屋の菟原娘子の奥つ城を行き来と見れば哭のみし泣かゆ（9一八一〇）

しかし、萬葉集には、昌預歌の「玉の緒の音のみし泣かゆ」の表現はない。その美しく悲しくせつない表現が読む者の琴線に触れる。

八三〇歌の次に存するのは、八三〇歌の「箏」と同じく、「写し絵」という亡父を偲ぶよすがの物を見ての作である（ただし、八三〇歌は題詞では視覚、歌では聴覚）。

写し絵を拝みて

八三一 写してし影は生けるをままながら御言問はさぬ父の君

かも

八三一 魂きはる世は術なしと思へれど思ひ遂がれぬわが心か

も

八三三 慰むる事もありやと高樓をふりさけ見れど見えぬ君か

生前に画に写した父の肖像は、まさに生きているのに、御言葉

問いかけてはくださらぬ父（八三三）。写し絵を拝み見ていると、むしようにせつない。第二首八三三は、「魂の尽きる世（寿命）は何ともしようがないと思っけれど、父に会いたいという思いを遂げられないわが心よ」の意。

「魂きはる世」は、萬葉集の、

魂きはるよまでと定め頼みたる君によりてし言の繁けく（11二三九八）、「よ」の原文は「世」。

と同用法と認められる。また、上三句には、萬葉集の山上憶良作「世間の住みかたきことを哀しむる歌」（5八〇四、五）の、

……たまきはる命惜しけど 為むすべもなし（八〇四）

の悲嘆の表現が投影していよう。第三首八三三も萬葉集の表現を踏まえており、上二句「慰むる事もありやと」は、柿本人麻呂「泣血哀慟歌」の

……我が恋ふる千重の一重も 慰もる心もありやと 我妹子が

やまず出で見し 軽の市に我が立ち聞けば……（2二〇七）

や、大伴池主歌の

……いにしへゆ言ひ継ぎくらし 世間は数なきものぞ 慰むるこ

ともあらむと 里人の我に告ぐらく……（17三九七三）

の表現を折衷した表現となっている。八三三歌第三句、第四句の

「高樓をふりさけ見れど」も、萬葉挽歌の「大殿を振り放け見つつ」(2一九九)、「大殿を振り放け見れば」(13三三三四)の表現の熟知に因るであろう。しかし、昌預歌のように、「ふりさけ見れど」と逆接の「ど」を介して「見えぬ」に続けた例は萬葉集にはない。心情に即しての昌預の工夫と言えよう。

「箏」や「写し絵」という家の中にあるよすがの物や高樓という建物そのもののよすがを見ての歌の後には、家の外の「月」を通して亡父を偲ぶ歌が配列されている。そのことには、「高樓」との縁も考慮されていよう。

月の明かりけるに詠める

八三四 世に座さば今宵の月も愛でましとかにかく父の忘らえぬかも

ぬかも

八三五 新玉の月日経ゆけど暫くも父の御影の忘らえぬかも

八三六 ぬば玉の夢にも見まくほりすれど寝も寝られねば術を知らなく

知らなく

八三七 父君の常におはしし高殿を振りさけ見ればさらに悲し

も

美しい月明かりの夜には、月を愛でた亡父のことが、ことに偲はれてならないのである。歌詠の表現から、第一首八三四は先掲昌預歌八二二を踏まえ、第二首八三五は先掲八二二・八二三を、第三首八三六は先掲八二三を、そして第四首八三七は八三三を踏まえていると言える。

以上、論述してきたように、八一三歌～八三七歌までは、昌預の亡父哀悼追慕の念によって緊密に織り成された一連の歌群と言えよう。この後、二十首を隔てて、再び八五八歌から八七六歌までに断

続的に亡父追慕の歌が現われる。歌番号によって示せば、八五八、八六一～二、八六三、八六九、八七〇～一、八七二、八七三、八七四～六の十二首である。これらは寛政二年(一七九〇)の七、八月頃の詠作と推定されるが、本来ならば八月の歌の前に置かれるべき文月の頃の歌(八七二)が葉月の八六九～八七一と八七三の歌の間に存するという状況を呈する。案ずるにこれは、歌詠の資料が異なるために生じた現象と推察される。上に指摘した事例の場合、文月の頃の八七二歌は、葉月の頃の八七三歌と同居する一資料にあるためにその位置を占めていると考えられるのである。この資料という点に留意するならば、先掲十二首の亡父追慕詠は、八五八、八六一～二と八六三、八六九と八七〇～一、八七二と八七三、八七四～六の五つの資料から成ると判断される。以下、具体的に見てゆきたい。

の八五八歌は次のとおり。

八月十五日曇りければ(第一首は略する)

八五八 ちちの實の父のみことのみまさねば今宵の月の曇らく

もよし

先に月明かりの夜における亡父追慕歌八三四～七を考察したが、亡父も昌預も毎年八月十五日の月を楽しみにしていたのであろう。しかし、今年はいにくの曇り空。昌預は、父がこの世にいないので今宵の月の曇って見えないのもかまわないと述べ、父不在の悲しみを照らし出している。萬葉集の

我が背子とふたりし居らば山高み里には月は照らすともよし

(六一〇三九)

の歌も熟知のことに属していたであろう。

群の八六一〜三歌に目を移そう。

葉月の頃ほひ父君の御陵へ詣でて詠める

八六一 朝毎に岩根松みて通へれど父のみことは見えませぬか

七

八六二 岩戸破る手力男にもあらませば隠れし君をまたもかへ

さめ

物へまかりける道にて詠める

八六三 朝毎に父と共々こし道を独りし行けば真うら悲しも

くる日もくる日も昌預は亡父の御墓へ通う。その折の歌が八六一〜二歌である。八六一歌は、毎朝御墓への途中、長寿の岩根松の大樹を見るにつけ、こみ上げてくる父不在の無常の悲しさを詠んでいる。おそらく、昌預は父とともに何度もこの長寿の松を見ては讚えたことがあつたのであろう。八六二歌は、御墓に到り着き、み墓の堅固な石組みを見た時に、日本神話に登場する手力男に連想が及んで詠んだ歌である。「手力をもつて、天照大御神を岩戸の外に出し、高天原に生命の光を蘇らせた手力男であつたならば、お隠れになつた父君を現世に帰えらすのに」と、はかない仮想を寄せている。

八六三歌は、八六一歌を承けて、「道」そのものを主題とした歌。毎朝父とともに歩いた道を今はただ一人とほとほと歩いてゆく。その時の心情を「独りし行けば真うら悲しも」と詠んでいる。これは、萬葉集の舍人等働傷歌群（2171〜193）の先掲190歌の直前に存する、

朝日照る嶋の御門におほほしく人音もせねば真うら悲しも

(189)

の結句や、大伴旅人の亡妻挽歌（3438〜440、446〜45

三）の、

妹と来し敏馬の崎を帰るさに独りし見れば涙くましも（四四九）

行くさには二人我が見しこの崎を独り過ぐれば心悲しも（四五〇）

のそれぞれの下二句を踏まえていると考えられる。

群の八六九歌と八七〇〜一歌は次のとおり。

八六九 名細しき月の光は照らせれど心さぶしも無き人思へば

父の夢に見えませければ

八七〇 秋深く慕ふ心や父君の一夜も落ちず夢にし見ゆる

八七一 宵々の夢の直ちに見る君を現に一目見る由もなし

八六九歌は、葉月の月の明るく美しい夜に亡父への思いを誘発されて詠んだ歌。上三句「名細しき月の光は照らせれど」は、萬葉集の柿本人麻呂「泣血哀働歌」の、

去年見てし秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年離る（2121）

一一）

の上三句を踏まえ、下二句の「心さぶしも無き人思へば」は、萬葉

集の「和銅四年辛亥に、河辺宮人、姫島の松原の美人の屍を見て、

哀働しびて作る歌四首」（4434〜7）の、

風早の三穂の浦みの白つつじ見れどもさぶし無き人思へば（四三四）

三四）

の下二句を踏まえていると捉えられよう。ただし、一点注意しておかなければならないことがある。それは、八六九歌の第三句の訓についてである。具体的に言えば、八六九歌第三句は「照らせれど」となっており、昌預が萬葉集二二一番歌の第三句を廣瀬本の「照ら

せども」の訓に拠らずに、「照らせれど」と訓んでいたことを物語っていることである。この訓の問題は、先に八二四歌の「青旗の小旗の」の箇所て論じたのと同様、賀茂真淵『萬葉考』の「照らせれど」の訓に拠つたためと考えることによって氷解しよう。

「父君を思ひて詠める」歌八六九の次に、「父の夢に見えませければ」と題する八七〇の歌が存するのは、対象を深く思い続ければ、夢に現われるという発想に拠るのである。

八七〇歌の「一夜も落ちず夢にし見ゆる」「一夜も落ちず」は「夜も欠かさず毎晩、の意」の表現は、萬葉集の、

我妹子がいかにか思へかぬばたまの一夜もおちず夢にし見ゆる

(15三六四七)

思ひつつ寝ればかもとなぬばたまの一夜もおちず夢にし見ゆる

(15三三三八)

などの襲用と思われる。けれども、上二句の「秋深く慕ふ心や」の魅力的な表現が当歌を単なる踏作歌から救っていると言えよう。

八七〇歌の「一夜も落ちず夢にし見ゆる」に、「現に一目見る由もなし」と対応させて、現実の会いのないことを悲しんだのが八七一歌である。

続いて 群。

文の頃父君のみ墓に詣でて詠める

八七二 朝宵に行き来をすれどこの道のたつたつしくも思ほゆるかも

るかも

葉月頃詠める

八七三 あら玉の月日は数多過ぎ行けどかへり来まさぬ父の君

かも

八七二歌は墓参時の歌。朝宵に御墓に行き来する道を「たつたつしくも思ほゆるかも」(心細く思われてならない)と詠んでいる。「たつたつし」は、萬葉集にたとえは次のように用いられている。

・夕闇は道、たつたつし月待ちて行ませ我が背子その間にも見む (4七〇九)

・草香江の入江にあさる葦鶴のあなたつたつし友なしにして (4五七五)

・天雲に翼打ちつけて飛ぶ鶴のたつたつしかも君しいまさねば (11二四九〇)

このような例も昌預の熟知に属していたであろう。下三句の類型表現を単なる類型表現に終わらせないので上二句の「朝宵に行き来をすれど」の客観的な状況表現、それによって下三句の心の闇(不安)が濃く漂うのである。その「行き来」と関わらせて、「月日は数多過ぎ行けどかへり来まさぬ父の君かも」と嘆いたのが、八七三歌であると読むことが許されよう。かけがえのない人が亡くなって一年も経たないうちは、亡き人がひよっこり帰ってくるような気がしてならないものである。そのような気持ちを悲しく打ち消すかのように、「かへり来まさぬ父の君かも」と詠み収めている。

八七三歌と同じく葉月の頃の作と推定される 群八七四、六の三首は、萬葉集歌に裏打ちされて開花した重要な歌々である。

父のみ隠れまして後萩の花を見て

八七四 わが宿に咲ける秋萩そを見れど心も行かず父し座さね

は

八七五 秋毎にめし給はらで愛でましし真垣の萩は咲きにける

かも

八七六 わが宿の籬まがきの真萩たか手折たりても見せまく欲しき父ぞいま  
さぬ

亡父は萩の花をこよなく愛した風流人であった。右の八七四、六の三首は、真垣の萩の花を通して亡父を偲んだ歌である。

この三首には、萬葉集の大伴家持の亡妾悲傷歌（三四六丁四七四）の影響が色濃い。すなわち、第一首八七四と第三首八七六は、亡妾悲傷歌群中の唯一の長歌四六六の、

我がやどに花ぞ咲きたる そを見れど心もゆかず はしきやし  
妹がありせば 水鴨みかもなすふたり並び居 手折りても見せましも  
のを……

の十句を意識し、傍線部の表現を第一首八七四に生かし、波線部の表現を第三首八七六に生かしたものと見て狂いはない。また、第二首八七五も、亡妾悲傷歌の、

また、家持、砌みりの上の罌なでしこ麦の花を見て作る歌一首

秋さらば見つつ偲しのへと妹が植うえしやどのなでしこ咲きにける  
かも（四六四）

を踏まえた作と見て間違わない。

昌預歌第一首八七四を裏打ちする亡妾悲傷歌四六六の傍線部の表現は、萬葉集中唯一の注目すべき表現であり、本稿者はかつて先掲拙著『テーマ別万葉集』（第二章四四頁脚注）に、「悲しみのあまり、愛する花を見ても心が向かってゆかず、ただぼう然とある家持の姿を浮き彫りにする実存的表現」と記した。昌預はその表現に本稿者よりもずつとはやくに注目し、しかもその表現の力を借りて自作歌を詠み成しているのである。萬葉集を深く深く読みこんでいなければできない所作である。

第二首八七五は、先述のように、亡妾悲傷歌四六四を踏まえての作であるけれども、上二句の「秋毎にめし給はらで」「めし」は「見し」で、「見る」の尊敬語「見す」の連用形。二句は、秋ごとに「ご覧にならないで、（の意）の布置によって、父のいない空虚で音なき空間に咲く萩の花の映像が、一首を読んだ直後、読者の心に映し出されるのである。

亡妾悲傷歌の四六六歌の波線部を踏まえる昌預歌八七六は、第二首八七五の下三句「愛でましし真垣の萩は咲きにけるかも」を承けて、「わが宿の籬の真萩」と歌い起こしている。「真萩」の語は萬葉集には見られない。この語を昌預は当歌の他にも、「安永八年亥七月より詠草」の、「昌嘩の一周忌にあたりければ」「昌嘩」は昌預の弟）の題詞を掲げる四八一、四の第二首に、

四八二 秋浅きまがきの真萩手た向けんと折あらぬ袖にかかる白

露

と用いている。これ以前にも、「安永二年癸巳秋詠草」に、「真萩はら」の語を次のように用いている。

二九二 宮城野や今を盛りの真萩はら朝立つ鹿も心有りなん

二九三 さやかなる月の光に真萩はら錦は夜ぞ見るべかりける  
「真萩」の語には、萩に寄せる昌預の格別の思いがこめられているのである。その「真萩」を「手折りても見せまく欲しき父ぞいまさぬ」と昌預が詠んだ時、第二首八七五の「秋毎にめし給はらで」の表現とあいまって、昌預の脳裏には、風流人であった亡き父と、命終間際に「萩の花咲きてありや」（萬葉集三四五五）と問うた萬葉の風流人大伴旅人が重ねあわされていたに相違ない。

見てきたように、父のことを思わない日は一日とてない昌預であ



るが、一周忌を迎えて悲しみをあらたにしたのが、八九六、八の「涙」の三首である。

父君のみまかりまししは昨日今日かのおもほ

えぬるを早一巡りになりたりされど袖の露は新  
ものごと置き余りつつ泣く泣く手向けし待るとて

八九六 白妙の麻の衣は脱ぎしかど涙の雨の限り知らずも

八九七 久方の天雲隠れ行く鳥の音にのみ鳴きぬこの年頃を

八九八 一とせも流れ来にけり落ち滝ち淀みもやらぬ涙と共に

八九六、八九七歌には、萬葉集の山上憶良の、

・かくのみや息づき居らむあらたまの来経行く年の限り知らず  
て(5881)

・慰むる心はなしに雲隠り鳴き行く鳥の音のみし泣かゆ(5898)

などの表現が投影してあるであろう。第三首八九八は、一年の月日のはやい流れを、悲しみの渦を巻いて流れる涙の川にたとえて感慨深い。

一周忌の後も、昌預の亡父追慕はつつづく。

或夜夢父公作歌

九三三 父乃実之父止俱々立出之此夜能由目乃波余悲下

(父の实の父と共々立ち出でしこの夜の夢の波よ悲し  
も)

という印象深い歌を生み成している。詩的言語「夢の波」が読者の心につち寄せる。

後の『梨園集』(寛政四年)には、

父君の三回忌に詠める

一一九一 吳竹の千尋の影を忍ぶにもその夜ながらの露ぞ乱る

写し絵を拝み奉りて

一一九二 面影は露たがはねど咲く花の匂ひかがれぬ絵こそつ  
られ

の歌や次の詠を収録している。

父の書き置き給ひし物を見て

一二〇七 いや増しに光こそ添へ残り置く君が形見の水茎の跡  
一二〇八 あだならぬ形見なるらし人毎にしるべと学ぶ水茎の

跡

先にも触れたように、昌預の父翼は、持明院流書道の奥儀を極めた書道の達人であった。昌預は若い時から父の書に象徴される学問の姿勢に励まされてきたのであろう。今は形見のその筆の跡も「いや増しに光こそ添へ」と昌預はいう。父の残した書は、人生の道しるべとして、昌預らの歩む道を明るく灯しつづけるのである。

#### 四 春日昌預と廣瀬本萬葉集

以上、廣瀬本萬葉集書写者の一人である春日昌預の「家集」(天明五年 寛政六年)の歌々を、萬葉集歌との関連に留意しつつ具体的に読み解いてきた。その結果、昌預が萬葉集歌を深く読みこんでおり、萬葉集歌に学んで自己の歌の世界を構築していることが明らかになった。その歌は単なる踏作歌を脱して開花している。昌預が敬意をもって用いた萬葉集歌の語句・表現・発想が、萬葉集中においてよりもいっそう深みやきらめきを賦与されている場合も少なく

ないのである。

かけがえのない父を亡くし、その深い悲しみ、そして追慕の念を表出した一連の作品は、日本文学史上にひとときわ光彩を放つ絶唱であると位置づけることができよう。だが、そうした意義深い作品も、実感として胸を打ち目頭を熱くさせる萬葉集歌の存在への敬意と共感なしには結晶することはなかったであろう。昌預の心を占める萬葉集の存在の大きさが思われるのである。

昌預と萬葉集とのかわりには、はやく明和六年（一七六九）、十九歳の時の歌と覚しき「五年詠歌」において知られる。すなわち、萬葉集の山部赤人の、

ぬばたまの夜の更けゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く

（六九二五）

を踏まえて、「千鳥」と題する次の歌を詠んでいる。

二七一　むば玉の夜のふけ行かばうち寄する波の立ち居に千鳥  
鳴くなり

また、昌預二十九歳の時の歌から始まる「安永八年亥七月より詠草」にも、憶良七夕歌（一五二七、九）（先掲）を踏まえたと覚しき次の「七夕」歌を収録している。

四二八　天の河浮き津の浪の立ち居つつ待ち焦がるらし妻迎へ  
船

このように、昌預十代のころから、萬葉集歌とのかわりが知られるのである。けれども、昌預と萬葉集の真実の出会いには、廣瀬本萬葉集二十巻の書写経験を通してであったと考えられる。そう捉えることによって、廣瀬本萬葉集の奥書の「天明元年十二月」から三年七月後の歌から始まる当「家集」に、萬葉集との有機的関連性

の色濃いた歌々が開花していることの秘密が解けるのである。事実、当「家集」の中には、廣瀬本萬葉集に賀茂真淵「萬葉考」の訓説の書き入れが多いことと響き合うように、『萬葉考』の訓説に拠る萬葉集歌を下地とした作歌例が二例確認された（先述）。調査を継続してゆけば、その数はさらに増えるものと思われる。

また、廣瀬本萬葉集には、卷三所収大伴旅人の亡妻挽歌の四四九歌第四句「独而見者」の右に朱で「預考二此而八四ノ誤ナラン」と書き入れがあるが、先述のように、昌預の亡父哀悼追慕詠八六三の下二句「独りし行けば真うら悲しも」は、その四四九歌の「独りし見れば涙ぐましも」及び四五〇歌の「独り過ぐれば心悲しも」を踏まえた表現と見られるのである。このことも、昌預における廣瀬本萬葉集の書写及び書き入れ経験と作歌との密接なかわりを積極的

に語り告げる事例と思われる。

卷三の書き入れは、四四九歌の他にも、三六二、四七二、四七七の歌句にも存し、計四ヶ所（先掲『校本萬葉集十八』「廣瀬本萬葉集解説」）。すべて「挽歌」部の書き入れである。このことは、昌預が卷三の「挽歌」部の歌々を入念に読みこんでいたことを物語る。そして、その「挽歌」部の歌の表現を亡父哀悼追慕詠に生かしたと言えよう。

では何故、亡父哀悼追慕の詠を成すに、上述のように萬葉集歌を強く意識したのか。思うに、それは、萬葉集歌の魂の助力を得て亡父の魂を鎮めようとしたからに相違ない。亡父が生前に萬葉集をこよなく愛していたならば、その効果はいっそう増す。

以上の考察とかわり、春日昌預の廣瀬本萬葉集の底本の入手経路とその書写に携わった人々を推察する契機となる重要資料が、当

「家集」に存する。それは次の歌々である。

天明六年午七月

駿河国蘆原郡蒲原村 稚宮大明神奉納十二首内

桜

七六六 玉蜻之暮之月者雖照有桜能陰迺起卷惜毛

(かぎろひのゆふべの月は照らせども桜の影の起たま  
く惜しも)

七六七 足日木之山乃桜迺真坂庭八重立雲乎分行如

(足引の山の桜の目前には八重立つ雲を分け行くこと  
す)

七六八 行暮志桜之陰尔宿共不知伝妹之阿乎待良牟加

(行き暮れし桜のかげに宿るとも知らずて妹が吾を待  
つらむか)

七六九 烏玉之夜目尔母見益終日仁桜乃花能艶不飽者

(ぬま玉の夜目にも見ませ終日に桜の花の艶飽かねば)  
動風裳莫吹散桜花吾兄乃君之見尔来及者

七七〇 (そよ風も吹きな散らせそ桜花吾兄の君が見に来るま  
では)

「天明六年午七月」は右五首の奉納歌が製作された年月と覚しく、  
実際に奉納されたのは「天明六年秋八月」であること昌預の奉納  
歌は七六六歌の一首のみであることが、先掲『校本萬葉集十八 新  
増補 追補』(「廣瀬本萬葉集解説」)所引の「稚宮奉納歌之序」と  
「奉納歌十二首」から知られる。

今、その翻刻文を送りがな・ルビ、句読点を付すなどしてわかり  
やすく読み下せば、次のようになる。

稚宮奉納歌之序

往昔、緑青、寧樂の朝廷の御代、山部宿禰赤人、鶏が鳴く吾妻  
に下向し賜へる時、不盡山を見放けて哥作り賜ひし。打ち縁す  
る珠流河の国田兒の浦の辺の蒲原郷なる倭歌宮の神社は、山部  
宿禰赤人の霊を祭祀となむ。此の神社に仕へ奉る某主の乞ふ  
る志のまにまに萬葉集の中より掻く數十余の歌をしも書き聚  
め一卷となも成せり。夫次に朋友等と十二首の歌を作りて共に  
大御神の廣前に捧ぬ。実に言葉の道に遊ばむ輩は挂巻も恐き此  
の瑞籬の神徳を仰ぎ奉らざらめや。時は天明六年秋八月望の日、  
なまよみの甲斐の国山梨縣萩原元克云ふ。

駿河国蘆原郡蒲原郷稚宮大明神奉納歌十二首

霞 春日翼

白雲もい去きはばかる不盡の嶺のみ雪も春の霞たなびく

桜 春日昌預

かぎろひの暮の月は照らせども桜の陰の起たまく惜しも

霍公鳥 藤原元直

我がやどの花橘の香くはしみ山霍公鳥こゆ鳴き渡る

五月雨 岩間徳光

一昨日も昨日もかくのみとの曇り晴間無く降る五月雨の空

櫻 初鹿建雄

秋の野に紐解く萩はこのころのそほ降る雨に散りか過ぎなむ

月 春日昌齡

ものふの八十伴男も名くはし今夜の月は見つつもあらむ

雪 藤原好謙

月影の照るかと思へば夜のほごる庭に降り積む雪にありける

水鳥

小野鶯道

夜くたちて氷やすらし隠沼にすたく鴨めの数鳴きとよむ

相聞

源 土麿

小山田の稲の穂向きの諸向きに吾は寄りなむ君がまにまに

別

五味益雄

今日別る明日香の河の河水の行き廻りつつ違はむ日もがも

羈旅

藤原庸昌

五百重山越えてし来れば故郷の妹や恋ふらむ馬つまづくも

祝

榛原元克

萬代も国安かれと靈ぢはふ神の御室に幣奉る

春日昌預とその歌は、第二の位置にある。最初に立つのが昌預の父春日翼とその歌詠である。このことは、この十二人の中で翼が最も重要な人物であったことを物語る。その翼の歌は「序」にいう山部赤人の「不尽山を望る歌」(萬葉集卷三・三二七・八)を踏まえた歌である。翼が萬葉集をこよなく愛していたことがうかがい知られるのである。「序」には奉納歌として「萬葉集」の中から四十余首の歌を選んで一卷としたことが記されている。その選歌のもとになった「萬葉集」は、廣瀨本萬葉集の底本であったと推察される(その写本である廣瀨本萬葉集も参照されたであろう)。この底本は、春日翼が所蔵していたに相違ないと思われる。先にも触れたように、翼の家は、和漢の古書を収蔵したという。その中に、廣瀨本萬葉集の底本となった、定家本萬葉集を祖とする写本が存したのではないかと想像されるのである。そして、翼が、その写本の書写を子の昌預らに命じたのではなかったか。「序」に「朋友等」と記され、歌を奉納した十二人は、廣瀨本萬葉集の書写を行なった人と、直接書

写を行なわなくても何らかの形で廣瀨本万葉集の書写に関わった人たちだと思われる(以上のこと、別稿に詳述する)。

廣瀨本萬葉集の成立には、学の道しるべであった春日翼への尊敬と感謝の気持ちが底流していると思われる。

(二〇〇二年 平成十四 五月十二日)

注

(1) その三〇七九番歌は、次のような歌である(歌の本文は先掲『春日昌預全家集』に基本的に拠る。以下同じ。原本を確認して稿者が改めた箇所もある。以下、必要に応じて注記する。)(  
六月六日虻来而我毛々乎昨祁流時作詞

三〇七九 阿我毛母尔阿牟加岐都岐阿那伊多夜阿岐豆毛賀母阿

岐豆波夜具閑 (あが股に虻搔き付きあな痛や蜻蛉もがもあきつ早

食へ) この歌は、『古事記』雄略天皇条の吉野の阿岐豆野の地名起

源と、倭の国を蜻蛉島と呼ぶ由来を語る記歌謡九七を踏まえ、

各句の頭が「あ」という音を持つように作った戯れ歌である。

萬葉仮名表記が成されたのも、『古事記』をふまえたことが

わかるであろう。(2) 『春日昌預全家集』には、一つの解として「乳」の字をあてて

いるけれども、原本の「ちち」をそのまま生かすことにする。

(3) 注(2)と同様に「乳」を改め、原本の「父」の字をそのまま

生かす。後掲九三三歌の訓み下し文においても同じ。

(4)『春日昌預全集』には「見し」。原本を確認して「見え」に改める。

(5)注(4)に同じ。

(6)『春日昌預全集』には「舟」の直上に「筆」の一字が存する。しかし、原文にはなく、衍字と判断して削除する。

(7)注(2)と同様、原本の「ちち」をそのまま生かす。

(8)『春日昌預全集』には「真憂く悲しも」とある。原本を確認して「真つら悲しも」に改める。

(9)『全家集』には「起きふす」とある。原本には「朝たつ」(稿者注)、「たつ」は「立つ」の意(とあり、その右に「起ぶす」と記されている。その「イ」は異本の「イ」で、元になった資料には「起ぶす」とあったことを示していると考えられる。よって、「起ぶす」は初案の本文で、「朝立つ」が確定本文であると判断される。

(10)『全家集』の「おもほしぬる」を、原本を確認して「おもほえぬる」に改める。

(11)「新也」は「新喪」で、今亡くなった身内の喪の意。萬葉集の「菟原娘子が墓を見る歌」(9-1809-1811)に「新喪のことも哭泣きつるかも」(1809)の表現がある。

(12)この題詞は、「或る夜、父公を夢に見て作る歌」と訓むべきか。  
(13)『全家集』には「玉蜻之書」を「玉かぎるしぐれ」と訓んでいる。けれども、同一歌を載せる後掲「駿河国蘆原郡蒲原郷稚宮大明神奉納歌十二首」の翻刻(先掲『校本萬葉集十八 新增補追補』の「廣瀬本萬葉集解説」所載の深山忠六氏所蔵資料の翻刻)に、「玉蜻能書」と表記されていることから、「かぎろひのゆ

ふべ」と訓むのが、作者の意図にかなっていると思われる。

(14)『全家集』には「分け行くがごと」。文脈を考慮して「分け行くごと」と訓み改める。